

第 4 回県立高等学校の在り方検討委員会のご意見等の概要

○ご意見等

適正規模・最低規模	・コミュニティの中で活躍する人材の育成や協働的な学びには、コミュニケーション能力や社会での基礎的能力が重要であるため、ある程度の生徒数が必要である。10人を大きく下回ると、グループ活動などの多様な学習形態が行いにくくなり、ICTを活用したとしても、対面で向き合う子どもたちが減ってくることは問題があると思う。 ・中山間の学校を維持するために努力をしているが、努力目標がなくなりモチベーションが下がると困る。適正規模・最低規模は設定せず、1 学年 1 学級20人以上、分校は 1 学年 1 学級10人程度を望ましい学級数とするという目標数値としてはどうか。
普通科系	・ほとんどの生徒が通学できる範囲に普通科系を配置しているため、現在の配置でよいと思う。 ・進学拠点校以外で難関大学等に進学したい生徒がいる場合は、進学拠点校とオンライン等でつなぎ、自分の選択したい科目や進学対策のような授業が受けられるとよいと思う。 ・進学拠点校という言葉は必要であるため残すが、中学校の進路指導時に明確に説明できる定義付けをしておかなければならない。 ・進学拠点校等ではない普通科をどのように地域で活性化・魅力化していくかが重要であり、進学拠点校等以外の各校をネーミングするとよいのではないか。このような学びができる普通科ということをアピールする必要がある、そのことを地域の中学校教員や保護者が理解していることが大事である。 ・連携型中高一貫教育校では、中学校と高校が連携しながら、地域の方々とともに育てた感覚がある。また、高校の教育課程や進路希望に応じた教科等、義務教育では分からない部分も多くあり教員も勉強になる。 ・連携型中高一貫教育校は、今後も配置されていない地域へ配置を検討することは従来通りでよいと思う。 ・高校からの情報が、地域には届いておらず全く分からない状況がある。今の高校の体制を学校と教育委員会が連携しながら、しっかり見せていくとよい。
産業系専門学科	・現計画の適切な配置の考え方では、随時、設置科やコースの見直しを進めるとあるが、随時よりも一定検討した上で述べた方がよい。ある程度見渡して決定していくとよいと思う。 ・高知県の企業と一緒に教育内容や学校運営について議論をする場や、産業界の意見を取り入れて学校を変えていくという仕組みがないと変わっていかないと思う。 ・産業界の現場は変わりつつあり、農業では株式会社としてICTを巧みに使って農業経営をしている。そのようなことが農業高校ではまだ見えておらず、学校運営にコミットすると変わると思う。 ・工業系では県内の各中小企業も世界と競争しないといけない状況になっており、ICTを自在に使うことが重要である。高校のカリキュラムが世の中の流れに合っているか、十分レベル感も満たしているか確認することが重要だと思う。学校運営協議会等において、若い経営者から意見を聞き、工業高校で何が必要か、何を勉強してほしいかを吸い上げてほしい。 ・県立の林業大学校との連携等を考えられないか。今後、森林総合科がどのような形で学びの場となるのかということを県の施策としても進めていくことが必要ではないかと思う。 ・県外から林業大学校に若者がきているが、県内では森林総合科やグリーン環境科は生徒が集まっておらず、林業社会が求めている人材を出すような仕組みができていないと思う。 ・産業系高校も小中学生が興味を持たないと入ってくれない。旧来の農業のイメージでなく、非常に高度化されたイメージを持ってくれた子どもたちが、高校でそのことを学べるという意識を持ち、また、産業系高校も小中学校とカリキュラム的に結びつき、先端の新しい産業の形で小中学生に対するキャリア教育部分に入り込むという連携が重要だと思う。 ・産業系の高校も進学でき、就職に直結しやすいところをうまく売り込む必要があると思う。 ・小中学校では探究的な学びが普及してきており、子どもたちは座って授業を聞くだけでは飽きてしまう。このことは、産業系の学校への志望動機につながってきているのかもしれない。高校がいかに産業界とつながり、実体験的な学びができるのかが重要である。 ・農業科に行っても農業に就職する人はごく一部で、多くは他の職業に就く。しかし、農業で学んだ社会性やグループでの学習、人とのつながりを通して、社会に順応していくととてもよい産業の専門の学校だと思う。専門系の学校も地域連携も含め、変わりながら残っていただきたいと思う。

総合学科	総合学科の配置は、現状で適切である。生徒減少による普通科への改編は逆行していると思う。普通科の特色化を考えると、総合学科を生かしていく方向で、従来の普通科への改編を検討する考え方はなくてよいと思う。
	総合学科の系列名が学校によってバラバラであり、内容がよく分からないものもある。同じような系列であれば総合学科の学校同士で同じ名前にした方が子どもたちは選びやすく、安心して進学できると思う。
定時制・通信制	子どもたちが学びにアクセスできる可能性がたくさんあることが重要であり、定時制や通信制は多様な学びを多様な形で提供できる学校であることが必要である。多様な学びを保障するためには、定時制の配置は重要である。
	通信制の配置は、現状で適切である。場合によっては、スクーリングの場所を2ヶ所に限定せず従来の定時制の学校にスクーリングの場所を広げ、I C Tを活用したスクーリングとうまく組み合わせる。また、郵送だけでなくオンラインを使った通信教育も取り入れていくとよい。
日本語を母語としない生徒への対応	高知県でも、外国籍の子どもの数が増えてきており、どのような対応がよいのか考えなければならない。高等学校での対応を考えた時に、最初に動きやすいのは定時制・通信制だと思う。
入試制度	県外生を募集している学校もあるが、本県は公立高校入試を3月に実施しているため、県外の学校はすでに合格が決まっており、本県が特色を出して県外生を集めようとしても、入試制度の関係により高知県に来てくれないこともある。
	積極的に山村留学生を受け入れる市町村もあり、高知県の高等学校へ進学を考えたい子どもも少なくない現状である。県外からの志願については、柔軟な対応を行うことで生徒数の確保につながるのではないかなと思う。
	中学校の学校運営や子どもの心情的な部分を考えると入試は3月にある方がよい。